

科学技術と社会のコミュニケーションとの在り方の研究
科学技術に関する社会的シンパシーとコミュニケーション活動の展望

(NISTEP Report No.17)

第2調査研究グループ 長浜 元 桑原輝隆 西本昭男

科学技術、社会およびコミュニケーションに関する調査研究会

このNISTEPREPORTNo.17は、科学技術政策研究所が組織した「科学技術、社会およびコミュニケーションに関する調査研究会(略称STSC研究会)」の2年4か月にわたる検討の結果を取りまとめたものである。

この研究会で取り上げた研究テーマは、その関係する事項の幅が広く、さまざまな分野の論点を数多く含んでいるので、予定の研究期間内に議論の集約を完全に図ることは困難であった。しかし、これまでの討議の内容をとりまとめることは、本研究の成果を基にこの問題の今後の取組を進める上で多くの示唆を与えるものと考えられる。したがって、本報告については、問題の分析、掘り下げ等について不十分な点が多々あると思われるが、今後とも個別の問題の分析も含めて研究を進めていくこととしており、本報告を機に貴重なご指摘やご批判、ご示唆を賜ることを期待している。

この調査研究を進めるにあたって、ご協力をいただいたSTSC研究会の委員の方々や客員研究官の方々には合宿も含めて11回にわたる会議さらには個別の打ち合わせを通じて、多角的で示唆に富むご意見を数多くいただいた。深く感謝申し上げるとともに、この場を借りて厚くお礼を申し上げたい。

本調査研究は、“科学技術に関する社会的コミュニケーションのあり方”に関する第2調査研究グループとしての最初の研究であり、このテーマがカバーする内容はどのような広がりを持つのか、また、どのような具体的な課題を持つのか等を明らかにすることが目標であった。

この調査研究の中では、その目標は大体達成されたように思われる。その中から主なテーマと課題をまとめてみると、おおよそ以下の5項目となるであろう。

- (1) 科学技術に関する人々の意識・態度等の調査・分析
- (2) 科学技術に関する人々のコミュニケーションの実態と在り方
- (3) 科学技術に関するコミュニケーション・モデルとしての「科学技術トライアングル」の考え方
- (4) 「科学者・技術者」と「生活者」およびそのアシスタントの接点としての地域における「科学技術コミュニケーション・センター(STCC:仮称)」と「センター・オブ・シンパシー(COS)」の構想
- (5) 科学技術に関するコミュニケーションを支援する国・地方公共団体、マスコミ等関係団体、企業、大学等の役割

したがって、今後は本研究を手懸かりとして、人々の意識やコミュニケーション関係の調査・分析、“科学技術トライアングル”のダイナミックな分析や「科学技術コミュニケーション・センター」と「センター・オブ・シンパシー」のさらに具体的な構想作りを目指して調査研究を続けていく予定である。

そのための基礎データを得るために有益な知見をもたらしてくれるものとして、科学技術に関する国内外の人々の意識調査の比較研究は重要な位置付けを持つであろうし、個々の問題に関連した設問の分析は、科学技術に関する人々の考え方や志向する方向を把握することに役立つであろう。

また、さまざまな社会事象についてのケーススタディはさらに具体的な人々の意識と科学技術の理解の状況およびさまざまな社会的バックアップの状況などを知らせてくれるであろう。その際、我々が考え出した“科学技術トライアングル”のコミュニケーション・モデルの有効性もチェックされるであろう。

本調査研究によって明らかにした科学技術に関するコミュニケーションの在り方がひとつの契機となって、日本の国内に多くの「科学技術コミュニケーション・センター」とそれらの核になる複数の“センター・オブ・シンパシー”が生まれ、国内の科学技術に関するコミュニケーションが活性化するとともに、諸外国の同種の機関との協力も活発に展開され、科学技術に関する世界的シンパシーの輪が広がることがこの研究が目指す未来の科学技術に関するコミュニケーションの展望である。